

介護老人保健施設 しおさい

症 例 概 要 ご利用者：90代 女性

病 名：高血圧、脳梗塞、右頬部挫創・右肋骨骨折・右血胸

利用サービス： 令和7年11月～長期入所

経 過：令和7年11月、左大腿骨頸部骨折により在宅生活が困難となり、当施設へ長期入所となる。同年12月、施設内で転倒し、骨折には至らなかったものの左股関節部の疼痛が残存して体動困難となり、心身ともに意欲が低下したご利用者に対し、多職種が連携しながら、その人らしい役割や生きがいを取り戻す支援を実施。教師としての経験を活かした役割づくりやご本人の希望に寄り添った支援を通して、自ら「やりたいこと」を発信され、その人らしい笑顔と生活意欲を取り戻した症例。

内 容

氏は長年学校の先生として勤務され、退職後も当施設でボランティア活動が続けるなど、人に教え、支える立場として生き生きと過ごされてきました。しかし、施設内での転倒により左股関節部に疼痛が残存し、体動困難から介助を要する生活となると、「何もできなくなった」「迷惑ばかりかけてしまう」と悲観的な発言が増え、活動への参加も減少し、一人で過ごす時間が多くなりました。これまで「先生」として周囲を支えてきた氏にとって、支えられる立場となったことは大きな喪失感に繋がっていました。

そこで、看護・介護・リハビリ・相談員が「ご本人らしい役割と笑顔を取り戻すこと」を共通目標に掲げ、多職種で支援を行いました。日々の声掛けを継続し、無理のない範囲でリハビリやレクリエーションへの参加を促しました。当初は参加を断られることもありましたが、参加された際には自然と体操のお手本となり、他ご利用者へ教える姿が見られました。その姿に教師として培われた経験が今も活かされていると感じ、「先生、今日もお願いします」と役割をお願いしました。その後はご利用者の前に立って体操を先導する機会が増え、リハビリやレクリエーションにも意欲的に参加するようになりました。「先生」と慕って集まるご利用者も増え、笑顔で過ごす時間も増えていきました。多職種が専門性を活かして継続的に関わったことで、氏は少しずつ自信を取り戻しました。

その頃から、それまでほとんど話されなかった希望を自ら伝えるようになり、ある日「本屋さんへ行って本を見たい」と話してくださいました。地域には書店がなかったため、相談員と連携し図書館への外出を実施しました。久しぶりの図書館では目を輝かせながら本を選び、「今日はありがとう。また行きましょう」と笑顔で話してくださいました。その姿は、以前の生き生きとしたご本人そのものであり、私たちにとっても大きな喜びとなりました。

今回の事例を通して、多職種が共通の目標を持ち、それぞれの専門性を活かして連携することで、氏は教師としての役割を再び発揮し、自ら希望を伝え、それを実現できるまでに前向きな変化がみられまし

た。その結果、生活意欲と笑顔が向上し、「その人らしさ」を支える多職種連携の重要性を実感しました。そして、氏の笑顔が以前のようにキラキラと輝く姿は、私たちにとって何よりの喜びとなり、その人らしい人生を支える介護の大切さを改めて教えていただいた症例となります。

[多職種による支援]

- ・看護師：疼痛・体調管理を行い、ユマニチュードを実践し安心して過ごせる環境を整えた。
- ・介護：日々寄り添い、継続的な声掛けや役割づくりを行い、活動への意欲を引き出した。
- ・リハビリ：身体状況に応じた機能訓練や活動支援を行い、「できること」を増やした。
- ・相談員（連携室）：本人の希望を実現するため図書館外出を調整し、社会参加を支援。
- ・事務：図書館外出時の送迎を担当し、安全な外出を支えた。
- ・アロマセラピスト：触れるケアやリラクゼーションを通して安心感を提供し、穏やかに過ごせる時間づくりを支援。